第14回日本の農業と食を考えるシンポジウム、6月18日に

食糧危機を乗り越える鍵は「豊受」自然農にあり

日本豊受自然農

由井代表が 解決策を発表

自宅配信 参加無料 豊受会員の事例発表も

第14回日本の農業と食を考えるシンポジウムは6月18日(土)午前10時から東京・世田谷のCHhom東京校で開催される。今回のテーマは食糧危機を乗り越える鍵は「豊受(自然農)にあり。ロシアのウクライナ侵攻によって世界の小麦を始め、あらゆる農産物が高騰し品不足にと食糧危機の兆しを見せている中でのシンポジウム。講師は日本豊受自然農の由井寅子代表を始めOKシードプロジェクト事務局長の印鑰智哉氏、フラワーエッセンス研究家の東昭史氏、たねのがっこう主宰の岡本よりたか氏。シンポジウムは大阪校中継、自宅配信で行われる。https://ec.homoeopathy.ac/product/3087

このシンポジウムは、自然型農業と六次産業化での日本復興をテーマに東日本大震災の翌年2013年から毎年開催しているもの。

今回の大会は、今秋以降予想される世界的な食料、経済、健康危機に備えるためにも、1人ひとりが、農業、食、健康、環境の問題を自身のテーマと認識し今から備えることが大事。広く多くの方にこれらの問題を知っていただくために、ライブ参加・オンライン視聴とも無料で開催することにしている。

午前10時からの午前の部、基調講演では、この秋以降予想される食料、経済、健康危機への解決策を由井寅子(日本豊受自然農代表が発表。合わせて、日本豊受自然農のスタッフからも食料危機へ主要穀類の自給率アップを目指す米、麦、大豆などの栽培や耕作放棄地を開墾、整備にしていく活動や、自家採種の農業の実践活動、安全、栄養ある食を提供する六次産業化事業なども報告する予定。

ライブ会場では、休憩時間には豊受オーガニックスショップからのおもてなし、レストランでは豊受自然農場の農作物を原材料に、御膳やお弁当も提供。併設ショップでは、ベランダでも自家採種が可能なプランターセットや豊受自然農場で自家採種された種苗も販売予定とのこと。

午後の部では、長野県で「たねのがっこう」を主宰し、自家採種で自然型農業を実践されている岡本よりたかさんに自然なタネや自家採種の農業の大切さについて発表。

また、世界の食の研究家でタネの安全安心の自主表示運動「OKシードプロジェクト」の事務局長の印鑰智哉さんには、タネ、農業、食料安全保障などについて講演。

フラワーエッセンス研究家の東昭史さんによる「危機の時代におけるフラワーエッセンスの活用」の講演と続く。

恒例の豊受の会員の事例・体験談発表の部では、仙台で鍼灸師とホメオパスとして活躍中、さらに、農業、食関連の活動をされている橋本孝子さん、山梨八ヶ岳山麓に夫婦で転居し新規就農されたホメオパスの井手麻子さん、鎌倉市にてコロナ禍、子どもたちの健康を守る抗ワクチンの活動に取り組まれているCHhom学生で市民団体「Think鎌倉」の関守桂子さん、全国に広がった世田谷区での学校給食への有機食材採用活動に当初から取り組まれてきたCHhom学生で「子どもたちの食を考える会世田谷」世話役の鈴木ともこさんの発表などを予定している。

アフターイベントとしては7月6日(水)に、千葉県佐倉市で自家採種での有機農業を数十年間実践されている日本有機農業研究会 種苗部会長の林重孝さんに「種から育てようーオーガニックの野菜のタネの採り方、育て方ー」をテーマにオンライン配信での発表を予定している。

毎回、盛況のシンポジウム

5月3日、ホメオパシーDayを開催

免疫力UPが大事

次なるパンデミック対策

ホメオパシー医学協会

【ほめ日記を引用】

日本ホメオパシー医学協会は5月3日、「ホメオパシーDay」を開催した。席上、で由井寅子名誉会長は、ビルゲイツが予告する次のパンデミックへの対策について講演した。

この日は由井寅子名誉会長をはじめ、ホメオパシーを理解、応援する2名の医師、松尾敬子JPHMA会長と4名の発表者が登壇した。

由井名誉会長は、次なるパンデミックへの、ビル・ゲイツの"予言"と、"コロナの次のパンデミックは「マールブルグ熱」である"とWHOやビル・ゲイツらの主宰するGAVI(ワクチン・アライアンス)が発表していることを受けて 出血熱の症状を分析しながら、ホメオパシーで対策していく方法を解説した。★自然免疫と獲得免疫、ワクチンで体が「慢性病状態」になる理由★小腸と赤血球と細胞の関係~千島学説より ★感情の抑圧により癌などの病原体が作られるメカニズムなどについても語った。『免疫の低下はなぜ起こるのか?』という、

この時代における重要な命題について考える上で、①免疫低下となる原因(毒物、薬品、食生活、感情的要因など) ②免疫を低下させないためのミネラルという解決策③植物を食べることで免疫力がUPする仕組みという切り口で、改めてホメオパシーや自然農の大切さを分かりやすく強調した。

日本ホメオパシー医学協会(JPHMA)会長の松尾敬子ホメオパスはバセドウ病(甲状腺)肝臓癌、脳腫瘍などの併発事例に対してのケースを紹介した。

甲状腺への処方、癌への処方を段階的に行い、ホメオパシー心配や恐怖心が出てきた「結核マヤズム」の患者さん。奇跡的な回復プロセスを処方経過と共に解説した。

医学界からホメオパシーへのエールとしては、2名の医師が登壇。

杉本武史医師は「熱は下げてはならない」として解熱鎮痛薬(NSAIDs)の危険さを、さまざまな事例(特に高齢者の容体急変や死亡事例)から訴えた。本来、病原体は熱に弱く、私たちの体を守る防御反応です。つまり感染症は治癒のための原動力。逆に、解熱鎮痛薬を使うことで細菌やウイルスが増殖し、免疫機能に不具合を起こしてしまう。体になってしまう。腰痛や関節痛などで、

それらを日頃から使っている高齢者は多いが、生死に関わる事例も多く起こるパターンも、こうした鎮痛剤の常用と言う。「熱はありがたい、発熱する力があることと、平熱が高いことは大切」とまとめ、患者の求めるままに安易に解熱鎮痛剤を処方する、現代医学の問題としても警鐘を鳴らした。

山内立行医師は「ホメオパシーと私」として、臨床の現場にいる医師として、コロナ禍の自宅隔離事情からの陽性患者データを独自に分析し、現状のコロナ対策への疑問点を分かりやすく示しました。「すべての情報は真実ではない。だからこそ、報道などの数値を鵜呑みにすることなく、自分の目で確かめ自分の心で感じ取ることが大切なのだ」と訴えた。

これからもまだしばらく続くであろうパンデミックの時代。毒物劇物はとり入れずに、使える知識や研究を使って免疫や腸内環境を整えていく。本質を見極めながら、「アロパシー」「ホメオパシー」の垣根を越えて手を取り合っていく未来がきっとあります、とした。

4月27日に推進大会

ビジネスジェット機運航

福井県

先の福井県議会で質問した長田光広議員の福井空港の活性化を図る上でヘリ観光の重要性を説いたが、それが実現に向けて動き出した。

福井空港小型航空機利活用推進大会が4月27日に行われた。

席上、小型のビジネスジェット機などの運航を行う東京の会社は、5月から福井空港と首都圏や大阪、それに県内各地を結ぶヘリコプターの運航を始めると発表した。

これは東京のセレスティアル航空が27日に坂井市の福井空港で発表したもので、5月から福井空港と東京ディズニーリゾートや大阪市のユニバーサル・スタジオ・ジャパン、それに、勝山市の恐竜博物館とを結ぶヘリコプターの運航を始めるという。

6人乗りのヘリコプター4機を使い、首都圏と大阪は1日4便、勝山市は1日2便、運航する予定。27日に福井空港から勝山市までの試験飛行が行われたが、勝山市までの所要時間はわずか5分で、首都圏は80分あまり、大阪までは40分あまりだという。1人あたりの片道の料金は首都圏で2万2000円、大阪で1万8000円、勝山までは7700円を予定している。

同会社では、県内の自治体や企業などと連携し、将来的に福井空港と20か所以上のヘリポートを結ぶ便の運航を目指すほか、ことし6月からは小型のジェット機を使って、茨城や神戸、北海道、それに沖縄などを結ぶ路線で運航を始めたいと話した。セレスティアル航空の社長は「新型コロナウイルスの収束後は海外と往来する観光客も増え、福井からどう出るか、どう来てもらうかが課題となる。福井空港からダイレクトに各地を結び、世界の窓口にしていきたい」と話し、「国内が元気にならなくてはいけません」ということから農業や物流にも触れていた。

「地方の特色を引き出し、産業を再生し、それを空で繋げるというのが本来の主旨です」と語った。

46年振りに飛ぶということで関係者は喜びの表情を見せていた。

白須氏に瑞宝重光章

令和4年春の叙勲

政府

政府は4月29日付けで令和4年春の叙勲受章者を発表した。それによると、旭日重光章に佐々木隆博元農林水産副大臣、瑞宝重光章に白須敏朗元農水省事務次官が輝いた。

瑞宝中綬章に門田正昭元北陸農政局長、佐々木明博元農林水産技術会議事務局長、武本俊彦元農林水産政策研究所長、鮫島信行元中四国農政局長、梅津準士元近畿中国森林管理局長などが受章した。